

2017年

4月10日

第301号

ゆうあい通信

発行所 石井記念友愛園

宮崎県児湯郡木城町椎木 644 番地

〒884-0102 Tel 0983-32-2025

御縁に感謝

園長 児嶋草次郎

例年により2、3週間遅れで、山桜が花と葉を同時に開き、幽玄（ゆうげん）な世界に見とれています。桃の花も華やかで癒されますし、園内を朝早く散策するのが楽しいシーズンとなっております。バタバタと日がすぎた3月からいつの間にか年度が変わり、この大自然の移ろいに身をゆだねながらも、現在気持ちの切りかえ中です。

今春は、7名の高卒生、支援学校生が、この友愛園を巣立ちました。大学進学が4名（九州保健福祉大学3名、岡山理科大学1名）、専門学校生1名、そして支援学校生2名は、就職です。大学在学中の者は、今春の4名を入れて11名になりましたが、50名前後の定員規模から言って、日本の児童養護施設では、あまり例はないのではないのでしょうか。

大学生を次々に輩出できるようになった要因について、私なりに考えて、ここで3点ほどあげておきたいと思います。

① 石井十次や岡山孤児院の職員・子ども達の築きあげて来た福祉文化によく近づいて来れているのではないかということ。戦後の石井記念友愛社の歴史を、私は発掘作業だと表現して来ましたが、60数年かけて、なんとなくその形が見えて来たということではないか。それは、伝統的な日本の子育て文化とも重なるものであり、子ども達もその歴史と文化の中で生活することに誇りをも持つようになって来れている、だから志を持つ余裕もできて来ていると感じるのです。

② 私が園長・理事長になりこの友愛園を改築したのが平成9年です。その際、幼児・小学生については、できるだけ家庭に近い形にし、住み込み職員の部屋を2階に設けました。一緒にフロに入り、添い寝をするなど、職員はほんとうの意味の寝食を共にする生活をするようにしました。そして、中学・高校生については日本の伝統的私塾を模範とした、自立のための労作・自律教育を中心とした生活指導を行うようにしました。

それからちょうど20年という年月がすぎています。現在大学に在学中の主要

メンバーは、20年前、この小学生寮（天心館）で幼児として生活をスタートさせています。彼らの心と体はこの園舎と、その当時から現在まで関わってくれた職員達によって養育されて来たのです。思春期をどう乗り越えるのかというのは人間共通の人生おける最大の課題ですが、彼らは、自分の運命を転換させるために、集団生活を前向きにとらえながらプラス思考で見事に乗り越えてくれました。甘やかすだけでは人生は変えられないと、改めて感じます。

③ 20年前この友愛園を改築した時のエネルギーを使って、同時に、石井記念友愛社の後援会を立ち上げることができました。石井十次が1万人の賛助会員を確保したという方法を見習ったわけです。平行して、「友愛通信」も発行し、その会員との御縁をつなぎ止めることに尽力してきました。石井十次に比べたら、10分の1（1000人）ほどの御縁ですが、それらの様々な御縁が、子ども達を成長させるための大きな力となって来たのです。その一つが学校法人順正学園様との御縁です。石井十次記念の奨学金制度を作って下さり、4年間の授業料を免除して下さいました。その輪は昨年、学校法人加計学園にも広がっています。このような御支援がなければ、現実的に大学進学は困難であります。石井十次の時代も、多くの子ども達が女学校や大学に進学していますが、おそらく、同じように御縁を頼っての進学だったのでしょう。

人を育てるといふ仕事は非常に難しいものです。結果が出るのは10年後20年後であり、その時々流行に流されてしまうと、先が見えなくなってしまう。ほんとに地道な仕事だとあらためて感じます。大袈裟に言うならば、60年、20年プロジェクトがようやく結実して来たということになるのかもしれませんが。

この歴史と文化を作って来て下さった方々、そして、多くの支援者の皆様に、あらためて感謝申し上げます。

感謝と言えば、今回書きとめておかねばならないイベントが3月に二つありました。

一つは、財団法人正幸会の70周年記念の式典です。3月19日、高鍋町のホテル四季亭であり、私も出席させていただき、改めて感謝の気持ちを抱きました。

財団法人正幸会は、石井十次と大原孫三郎に仕え、国会議員、宮崎市長、高鍋町長等を務め、実業家としても広く活躍された柿原政一郎氏が昭和22年に設立されたものです。藩校明倫堂の精神文化の復興を願っていた父正一氏の遺志を引き継ぐため、遺産の大半を投げうって立ち上げられています。その名称には西南戦争に参戦して亡くなった、祖父の名前を冠しています。

具体的には、明倫堂に関する図書の保存のための明倫書庫や図書館等を建設し、高鍋町に寄贈。当時高鍋町再建のため町長も引き受けていたのですが、その給料

を全額図書購入費に振替えたとか。この図書寄贈は、今も毎年近隣の小学校等への図書費の寄付という形で続いています。また、言わば明倫堂文化の発掘作業にも資金提供され、今回は、「高鍋藩秋月種茂時代の用心日記」が「明倫堂文庫を学ぶ会」の皆様の手によって出版されています。

私はこの式典において、石井記念友愛社理事長として次のようにお礼の挨拶をさせていただきました。

「私達石井記念友愛社にとりまして、柿原政一郎先生は大恩人であります。石井十次亡き後、大正 15 年に岡山孤児院は、いったん閉じられましたが、それから 20 年後、日本が戦争に破れ国土が荒れはて、人々の心も消沈している時、私の父児嶋虜一郎を鼓舞激励して石井十次記念の児童福祉事業を再開させたのです。昭和 20 年 10 月でした。凡人であれば、まず自分や自分の家族が日々衣食住を確保し平和にすごすことを優先順位の第 1 位にかかげるところですが、柿原先生は違いました。おそらく、石井十次の弟子であった柿原先生は、岡山孤児院の解散を石井十次の遺志に反するものとして受け止めていて、ずっと再開の機会を狙っていたのだと思います。

柿原先生御自身、広島で原爆を体験され、焦土と化した街もご覧になっておられます。すぐに新しい日本のあるべき姿をイメージされ、その時をチャンスとして立ち上がられた柿原先生のエネルギーには、私は大きな希望と勇気を与えられて来ています。リーダーたるものは絶望の淵の中でも、しっかり未来を見つめなければならぬのだと教えられます。

父嶋一郎は、中学生の時に画家であった父児嶋虎次郎を亡くしていますので、柿原先生は父にとっては、父親的存在であり、父にとって柿原先生の導きは石井十次の導きでもありました。とは言っても、岡山孤児院の歴史や文化を何も引き継いでおりませんので、すべての準備は柿原先生がされたと思われれます。

柿原先生のすごさは、「恩を売らない」という器の大きさにも表れております。常に石井十次の孫である父を立てて、石井記念友愛社の事業を後方から支えてくださいました。

柿原先生のこの御遺志は、長女の竹本哲子様を初め、今日御出席の御遺族・御親族の方々にも脈々と流れていて、現在も色んな面で支えて下さっています。このような御縁に、私は常に感謝しております。」

もう一つの重要なイベントとは、社会福祉法人石井記念愛染園 100 周年記念式典であります。石井記念愛染園の発祥の地、大阪市中央区日本橋に、石井十次と大原孫三郎氏を顕彰する碑を建立するというので、私も招待していただいたのです。3 月 22 日でした。石井十次の事業は、岡山から大阪にも飛び火しまし

た。同じ高鍋出身で友人の大阪府警部長から、大阪のスラム街に浮浪児 2000 人がいる、なんとかならないかと相談を受けたことが進出のきっかけだとか。その実態調査と開設準備を引き受けたのが、先ほどの 26 歳（明治 42 年）の若き柿原先生でした。

その当手を振り返り、晩年の柿原先生は次のように述べています。（「柿原政一郎」財団法人正幸会発行）。

「私は敷金七十円を入れるや、畳一枚を持ち込み、そこに泊まりながら大工を励まして大修理に取りかかったが、毎夜の南京虫の総攻撃には閉口した。しかし、泊っておらねば物が盗まれるので仕方がなかった。」

それらは、夜学校、保育所、隣保事業等としてスタートしています。この大阪の事業のその後も決して平穏ではなかったようですが、最大の危機はやはり石井十次が亡くなった時でしょう。しかし幸いなことに、こちらは大原孫三郎氏が石井記念愛染園として再編成し、病院を核として、その後大きく発展。戦後再スタートした私達から見ると、仰ぎ見る巨木に成長されており、常に兄貴分として目標となっています。

現在は約 270 床の総合病院を中心に、介護事業、保育・隣保事業に取り組んでおられます。

当日、大原孫三郎氏の孫である大原謙一郎様も来られていて、私達は、碑の前で一緒に並んで除幕式に参加させていただきました。

こうして、石井十次、大原孫三郎、柿原政一郎の友情が時を越え、70 年 100 年と続いているというのは、一つの奇跡でもあるのでしょうか。感謝しながらもできれば、この御縁は今後も続いていってほしいと、強く願いました。